

< 今日の説教のポイント 詩編100編1～5節 >

新しい年を迎えた元旦の朝の礼拝です。そこで、主の民イスラエルが礼拝に向かう際に歌った詩編の御言葉に聞きたいと思います。

1 なぜこんなに喜ぶのか？

これは礼拝に行く際に歌われた詩編ですが（「喜び歌って御前に進み出よ」(2)。4 節も）、喜び一色です。艱難と悲しみに満ちた歴史を辿り続けた民がなぜこんなに喜ぶのでしょうか。

2 出エジプトの出来事に立ち帰る

実は、この詩編の言葉には、彼らのある原体験が色濃く反映しています。例えば、「主に仕え」(2)「主こそ神であると」(3)といった表現は、奴隷であったエジプトから主なる神様が救い出して下さった時のことを思い出すためにイスラエル人が用い続けて来た表現なのです（出エジプト記 3:12、申命記 4:35）。苦しみが無いから喜ぶのではないのです。苦しみの中に置かれている時にも、かつて神様が彼らに起こして下さった救いの出来事を思い出し、「今の現実に関心を占められてはならない。この救いを与えて下さった神様の約束の言葉の方が確かなのだ」、そう思うことにしっかり立つことに取り組む中で生み出されてきている喜びなのです。でもやはり頑張らなければならぬのでしょうか？

3 パウロの「苦難→忍耐→練達→希望」。そこで問題になる「信仰」。

「頑張る、我慢する」は、キリスト教においては、パウロが「忍耐する」という言葉で語っている理解で捉えることが大事です（ローマ 5:1 以下）。そこでは、忍耐とはキリストとつながるもの、また、希望を生み出すものとして捉えられています。その時に、忍耐はただ「自分が頑張る」ことではなくなるのです。ここでパウロは「信仰による義」ということを強調しています（ローマ 5:1、3:21-24）。この「信仰」ということで大事な点は、私たちが信じる強さではなく、信じたことの内容の大事さを考えているということです。神様がイエス・キリストによって成し遂げて下さったことの持つ意味です。それが、私たち全ての者の代表であるイスラエル人に成し遂げて下さった出エジプトの出来事が持つ意味をもっと確かなものにしてくれるのです。すなわち、主なる神様は必ず救い共にいて下さるお方だということです（「真実:エメト」の意味は「堅い」）。だから叫んでいるのです、「主は私たちを造られた。私たちは主のもの、その民 主に養われる羊の群れ」(3)と。